

タイトル:平成 27(2015)年度 研究セミナー(第 16 回)

日程:平成 27 年 12 月 18 日(金)～20 日(日)

場所:東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 3 階 マルチメディアセミナー室(306)

「リビア政治エリート分析ーカッターフィーは政権初期にどのように権力を掌握したのか」

田中 友紀(九州大学大学院)

2015 年 12 月 18 日より 3 日間、「中東☆イスラーム研究セミナー」に参加させて頂いた。同セミナーの存在は以前より知っていたが、情けないことに合計 2 時間の報告に不安があり何年か見送っていた経緯がある。海外の大学院で国際関係論を修めたのち、博士課程で地域研究に転じた私は、そもそも中東およびイスラーム研究者と接する機会が少なく、今まで指導教官以外から専門的なアドバイスをもらう機会はほとんどなかった。しかし、今回は腹をくくりセミナー参加を決めた。

早朝に九州を発ち、疲れも緊張もピークとなった夕刻、「リビア政治エリート分析:カッターフィーは政権初期にどのように権力を掌握したのか」というタイトルで、博士論文の理論的枠組みを中心にお話をさせて頂いていただいた。私の博士論文は、増原綾子氏のインドネシア・スハルト体制研究から着想を得て、カッターフィー政権がどうして長期存続したのかを、「パトロネージ」と「暴力」という2つの視点で分析していくものである。結論として、1970 年初頭には安定していたカッターフィー体制はパトロネージの配分と暴力の激しさの程度が変化することで変容し、2011 年の NATO 介入時直前には崩壊寸前だったということの説明させて頂いていただいた。

質疑応答では、理論を説明する図表の問題点、問いと結論の整合性が取れないこと等についてご指摘やご質問を頂いた。先行研究が少なく、カッターフィーが行った政治の実相を伝える一次資料がほとんどない、という私の悩みにも先生方から多くのアドバイスを頂戴した。また、セミナー参加者からはリビアにおける「部族」の定義の精緻化や、アラビア語転写の正確さに関して貴重なアドバイスをいただいた。本当に、感謝の念に堪えない。

自分の報告の後は、他の参加者の報告をじっくりと拝聴させて頂く機会を得た。このセミナーは、中東、そしてイスラームと共通項はあるものの、参加者のディシプリンは政治・文化人類学・国際関係論・ジェンダーなど多岐に渡る。その多様な博士論文の骨子を拝聴し、新しい知識を得たことも大きな収穫であった。

以上、本セミナーは、切磋琢磨する博士課程の仲間がいない私にとって、極めて有意義な機会となった。これは、ひとえにアジア・アフリカ言語文化研究所所長・飯塚正人先生をはじめとする先生方、事務局の皆さまのご尽力の賜物である。このことに改めて深く感謝申し上げますと共に、今後も同研究所主導の下で研鑽の場が継続されることを強く願う。